

Title	価値論より見たるセイの地位
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.11 (1925. 11) ,p.1588(48)- 1632(92)
JaLC DOI	10.14991/001.19251101-0048
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19251101-0048">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19251101-0048</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 價值論より見たるセイの地位

増井幸雄

Jean-Baptiste Say は千八百二十七年の某日、Nantes 在住の弟 Louis Say に送つた書簡中に、『予の經濟學を研究するや茲に三十年、即ち大臣就任以前の Clavière に秘書たりし時に始まる。Clavière は Smith の書一部を藏して屢之を研究し居たりしが、予も其の數頁を讀んで多大の感動に打たれ、早速、予の今も猶ほ所藏する一本を取り寄せたり。此の當時以來、予は偉大なる判斷力ある諸學者の意見と異なる意見を懷く毎に自ら誤らむことを虞れたり、予は自己の考案を立てむことを企てたるも而も殆んど常に予の誤れるを發見せり。……予は、汝が Smith を評し又 Malthus の正鴻を得たる唯一の著書を評する態度を悲しむ。誤は汝に在り、事物の本性は汝に永久的の反證を與へむ……』<sup>(3)</sup>と云つて居る。又、其の著 *Letres a M. Malthus, 1820.*

中に於て『予は Adam Smith を尊敬す、Smith は予の師なり。予の始めて第一歩を経濟學に踐み出せしとき、而して足許未だ定まらずして、貿易差額論者によつて一方に押され、純生産論者によつて他方に押され、一足毎に墮きつゝありしとき、Smith は予に正しき道を教示せり。予は、Smith の天分の豊かなるを披握しつゝある其の『國富論』に支へられて單獨以て歩むことを覺えたり』<sup>(4)</sup>と云つて居る。Say の著作中の幾多の個所に Smith の思想が其の儘に再現して居るのも怪しむに足らないのであつて、多くの經濟學史家が Say を評して、Smith の思想を平易化して之を普及せしめたる者となせるも<sup>(5)</sup>當に其の處と云ふべきであらう。然しながら、Say は必ずしも總べての點に於て Smith の足跡を辿つたものではなく、個々の點に於ても全體の體系に於ても、彼れが Smith に修正を加へた點は少なくないのである。<sup>(6)</sup>私は、Say が師 Smith から遠ざかつた點の一つを其の價值論に於て見出す。以下、價值に關する彼れの所説を、(1) 價值の意義、(2) 價值の發生原因、(3) 價值の分量の三點から窺ひ、次に之を、一方では Smith、他方では Turgot 及び Condillac の價值論と比較して、Say の所説が英佛何れの先學に一層多く負ふ所あるやを見たいと思ふ。

- (1) J.-B. Say à son frère Louis Say (de Nantes). Paris, 1827. (Œuvres Diverses de J.-B. Say, Guillaumin, p. 545.)
- (2) Lettres à M. Malhus, 1820. Première Lettre. (Cours Complet, Édition Bruxelles, 1844, p. 622.)
- (3) 慶應義塾大學經濟學部編『經濟學說研究』二二八—二三〇頁參照。
- (4) Comnard, Histoire des Doctrines Économiques, Tome II, p. 253-4.

## II

Say は經濟學は富の生産分配消費が如何やうに行はるゝかを説明するものであるとして居るが、其の謂ふ所の富とは、世間普通の用語法に於けるが如くに欲望を満足せしむる財の豊富なことを指すのではなく、又それは物質そのものより成るにあらず、Smith の云ふが如く必需品便宜品より成るにあらずして、それ自身に價值を有し占有者の専有財産たるものを指すとなし、富は價值より成るとする。(a) 勿論彼れは自然の賜たる水空氣光線健康等が財たり富たることを否認はしないが、然しそれは自然的の富であつて社會的の富でなく經濟學上の富でないとし、經濟學上のは富價值より成るとするのである。(b) 然らば此の價值とは何であるか。Say は、之を富の測定に役立つ尺度と見て居る。彼れは、富を物質たらずして價值たりとするが、富は大なる富とか小なる富とか云ふ如くに分量で考へられるから、

價值も亦分量で考へられるのであつて、『價值なる觀念は富の測定の觀念から切り離すことが出来ない』(c) とする。故に、彼れにとつては、價值が憶斷的たらざる客觀的の數量で表はされることが必要となる。彼れは云ふ。「一個の事實たる評定し得る分量なるものは、一切の科學的學理の唯一の堅實なる基礎なり。予は信ず、一切の經濟的研究に於ては先づ此の基礎を確定することを要すと。何となれば、結局何が吾人の財の増減を來すかを知らむと欲せば、先づ大又は小を構成するもの如何を知るの必要あるを以てなり』(d)。彼れが價值を主觀的價值使用價值の意に解せずして、客觀的なる交換價值の意に解するに至るは當然の事である。

- (a) Cours, Pt. I ch. 1. (p. 32-3); Traité, Liv. I, Ch. 1.
- (1) Lettre à Thomas Tooke, 15 avril, 1828. (Cours, p. 632.)
- (2) Catechisme, ch. I. (Œuvres Diverses, p. 8. note.)
- (3) Lettre à Ricardo, 19 juillet, 1821. (Œuvres Div., p. 419.)

然らば、價值は如何なる場合に Say の要求するが如くに確定した客觀性を持つに至るか。彼れは云ふ『吾人が大なる富を所有せむが爲めには、吾人の有する財を頗る高く評價するを以て足れりせず。予が見て以て住心地よしとする家屋

を建築して之を十萬フランと評價すとするも、予は此の家屋によつて十萬フランだけ眞實に富めるにあらず。……一の富が價值たらむが爲めには、それが所有者によつてにあらず、他人によつて承認されたる價值たるを要す。然るに、一の價值が承認されたることの確證は、他人が之を得むが爲めに、價值を有する或る分量の他物を交換に與へむとを承諾する場合に示さる。』尤も、『自己の使用の爲めに物を製作する人の取得し消費する富は、賣手と買手との間に對抗的に討議決定せられたる價值を有せず。斯かる場合には、若し此の物を賣るを可とすと判断したる場合に得べかりし價格を標準として此の富を評價することを得。』『弟 Louis Say は富を測るに、之を缺くことによつて生ずる不便を以てせむとするも、此の不便の大きさは誰が之を判定するや。此の大きさに就いては人間の數と同數の意見あり得べし。……憶斷的なる評價は尺度とはなり難し。若し、人が一般に、自ら之を缺かざらむことを撰ぶ所の他物を得むが爲めに自ら敢て之を缺かむことを諾する物を以て右の不便の評定と認むることとせむか、それは即ち交換價值によつて評定を行ふことに外ならず』。斯く Say が、價值は交換の場合に生ずる現象によつて測

るの外なしとするのは何故であるか。それは、彼れが『價值は其の絶對的の大きさを評價することが出来ないものである、それは常に比較的のものに過ぎない：價值の觀念は距離の觀念と同様である、吾人は一物の隔て居る距離を云はむが爲めには、其の物から幾分か隔てたる所に在る他の物を指摘しなければならぬ』と同様に、一物の價值の觀念は常に他物の價值との或る割合を豫想する』と考へるからである。故に彼れは、價值を定義するに當つて物の價值なる語をば直ちに物の交換價值評定價值の意義に制限的に解釋し、之を定義して次の如く云ふ。『物の價值とは、物の値する所のものを云ふ。それは、人の之と交換に取得し得る評價可能の他物の分量なり。』『經濟學上に於ては、價值とは、常に交換價值に外ならず』。

(4) Lettres a M. Malhus, Ve Lettre. (Cours, p. 622); Cours, Pt. I, ch. 2. (p. 33.)

(5) Catechisme d'Economie Politique, ch. II. Œuvres (Diverses, p. 11. en note.)

(6) Cours, Pt. I, ch. 2. (p. 34. en note.)

(7) Ibid.

(8) Traité, Epitome, art. "Valeur des choses."

(9) Cours, Pt. I, ch. 2. (p. 33.)

尤も、Sayは『物がそれに存する交換價值(valeur d'échange)と頗る相違せる使用價值(valeur d'utilité)を有することあるは何人も知る所なり。例へば、普通の水は頗る必要なれども殆んど何等の價值を有せず、然るに、金剛石は殆んど何等の役に立たざるにも拘らず多大の交換價值を有す』云々と述べて、Smithと同様に、交換價值と對立せしめて使用價值なる語を用ひて居る所がある。然しそれはSmithと同様に經濟學上の價值に二種あることを説くのではなくして、寧ろ反對に使用價值なる觀念を斯學の範圍から驅逐せむが爲めである。即ち彼れは、Smithが水と金剛石とを例として使用價值と交換價值との相違甚しきことある旨を指摘するに止めたるに反し、右の引用文に語を續けて『然しながら、水の價值は經濟學の範圍に屬せざる自然的の富の一部たること、並びに、金剛石の價值は斯學の範圍に屬する社會的の富の一部たること明白なり』<sup>(9)</sup>と云つて、水の有する多大の使用價值を經濟學上の價值たらずとして居るのである。思ふに、Sayの見る所によれば英語の Value in use は佛語の Valeur d'utilité の ヲンであり、『Valeur d'utilité』は單なる utilité にならざるが故に、單に utilité の一語を以て足る』<sup>(10)</sup>とせられて、價值の一種としての使用價值は放棄せられ、それが效用なる地位に引き下げられて居るのであつて、彼れは、使用價值の語を棄てる旨を種々の機會<sup>(11)</sup>に於て言明して居るのである。

(9) Cours, Pt. I, ch. 2 (p. 33-4)

(10) Ibid.

(11) Lettre a Ricardo, 19 Juillet, 1821. (Cours, p. 606.)

(12) 例へば彼が『英國の Ricardo 氏は予が Adam Smith に従つて其の所謂 Value in use を斟酌する所なかりしことを非難するも、Value in use は Valeur d'utilité 或は寧ろ valeur を除ける單なる utilité なり。何となれば、Valeur d'utilité なる語は、予の見る所によれば表現方法の誤なるを以てなり。予が Smith の此の語を棄つる理由は茲に在り。』(Catechisme, ch. XI, en note. (Œuvres Diverses, p. 42-3.))と云へるが如き、或は『貴下は、Say 氏は常に使用價值と交換價值との間に存する本質的の相違を忘れ居れり』と云はる。疑もなく予は之を無視す。何となれば、經濟學に於ては、吾人は、附りにする場合の外は、費用を以て與へられたる效用以外のものには關心せざるを以てなり。價值なき效用は吾人の幸福の評量に入らざること、頑健なる健康の然ると同様なるものあり。』(Lettre a Ricardo, 19 Juillet, 1821.)と云へるが如きは是れである。加之、彼れは、『Adam Smith 自身も價值に二種あることを指摘し、私見によれば不適當にも一を使用價值、他を交換價值と命名したる後、前者を完全に放棄して、其の著作の全部に於て交換價值のみを取扱へり。』(Lettres a Malhus,

Ve Lettre. (Cours. p. 642)を讀む。自己の態度を擁護するに Smith の權威を以てして居る。

## 三

Say は、價值の發生原因を何に求めたか。彼れは、先づ第一に、物が貨幣と換へられ得るが爲めに價值あるにあらずとする。即ち、『家は、其の獲得者をしてエキュを獲得せしむるが故に富たるにあらずして、そがエキュの買ひ得る一切のものを取得せしむるが故に富たるのである。エキュそのものは、之によつて人の獲得し得る物に基づいて富たるに過ぎない。何となれば、若しエキュを以て何物をも買ひ得ずとせば、エキュそのものは何等の價值なかるべきが故である。物を富たらしめるのは購買の力である。然るに此の能力、人が物の價值と呼ぶ所の此の性質は、此の評價を行ふに役立つ物から離れて、人の評價する物件の中に在る』とす。然らば、價值の原因は物それ自體、物の物理的性質に存するや。Say は之を否認して、其の原因を物の效用に求める。曰く、『家が價值を有するは家に宿れる一性質に基づく。人の之を買はむが爲めに提供する評價可能物の分量は、此の性質の表示たり尺度たるものなり。然るに、物をして價值を有するに至らしむる此の性質は、其の物の

效用たること明かなり。人は、自己の用に供し得る物に對してのみ價格を附す。之を買はむが爲めに犠牲を敢てせむことに同意するは此の性質あるの故に基づく。蓋し、人は何物にも役立たざる物を得むが爲めには何物をも與へざるを以てなり。』故に『人の物に附する價值の第一の基礎は、其の物の充用せられ得る用途に在り』。『或る物が人間の種々の欲望を満たし得る能力は之を指して效用と呼ぶことを得。……物の效用は其の價值の第一の基礎なり』とす。

(1) Cours, Pt. I, ch. 2. (p. 37.)

(2) Cours, Pt. I, ch. 3. (p. 38.)

(3) Traité, Liv. I, ch. 1. (p. 5.)

然らば此の效用とは何か。Say は之を解して『經濟學上に於ては、效用とは、物が何れの方法に於てなりとも人間の役に立ち得る能力なり』と云ふ。然し彼れは、之を物の有する物理的性質とは見ずして、人間と關聯せる道德的性質と見る。物が始めから獨立に有するものとは見ずして、吾人の欲望から物に移されたものであると見、吾人の欲望が之を満足せしむる一切のものをして效用あらしめるもの

であるとするのであつて、效用の基礎を欲望に置いて居る。元來人間の欲望は、肉體的・道徳的の性質により、環境により、文明の程度により、風俗・習慣により、年齢・趣味・慾情・性癖等によつても相違する相對的のものであるから、同一の物の效用も時と場所との如何によつて相違なきを得ないが、凡そ何等かの欲望の存する以上は之を満たし得る物が效用を有することとなる、と做すのであつて、其の欲望が道徳の見地からは認せらるゝと否きを問はない。即ち彼れは、『道學者の眼から見れば、世には是認され得る欲望と然らざる欲望とがあるから、彼等にとつては、物の充たし得る欲望の種類如何を検討することが必要とせられるが、價值の發生原因を知らむことを問題とする經濟學者に至つては、種類の如何を問はず凡そ價值發生の源たる需要を喚起する所の欲望を満足せしめ得る一切の物に共通なる性質を指摘し命名すべきである。』と做し、『此の共通の性質を指稱するに、羅旬語 *utilitas*, *uti* より來れる *utile* を以てし得ると信ずる』と云つて居るのである。

(5) *Traité, Économie, art. Utilité.*

(6) *Cours, Pt. I, ch. 3 (p. 38); Catechisme, ch. II (p. 10.)*

(7) *Lettre à Malthus, Juillet, 1827.*—此の書簡は、Say が效用なる新語を用ふるに當つて、凡そ定義を下すに際して守るべき四個の原則の總べてに背反して居る旨を Malthus から非難されて居る (*Definitions of Political Economy, ch. IV*) のに對する答辯として書き送つたものである。

價值を作るものは效用である、と云ふ場合に於て、Say は效用なる語に最も廣い意味を與へる。『效用には、直接の效用と間接の效用とがある。總べての消費物件の效用の如く直ちに消耗せられ得るものは直接の效用であり、直接に使用せられ得る物件を取得するの手段として價值ある物件の效用は間接の效用である』<sup>(7)</sup> が、茲では效用の一語を以て此の兩者を包含せしめて居る。『昔インディゴ・明礬等は、直接には何等吾人の欲望を満足せしむるにも適して居ない……にも拘らず價值を有する。それは、是等の物は染物業者には有用だからである。其の效用は布の效用と結合せしめられるの必要もあるも、爲めに眞實の效用たるを失はない。秣は吾人の直接に使用すべき物ではないが、吾人に役立つ動物を養ふの效がある。それ自身には何等吾人に役立たざるも、而も吾人に役立つ動物を養得せしめ得る商業手形年金契約等の價值を生ぜしめるのは此の間接の效用である。耕地の價

値を生せしめるのもそれである。工業上の原料品の價值も斯くして生ずる』<sup>(8)</sup>

(8) Traité, Epitome, art. Utilité.

(9) Cours, Pt. I, ch. 4 (p. 42)

欲望を基礎とする效用を以て價值發生の第一の基礎なりとするの言に於ては、生産費を以て價值發生の根源なりとする説を排するは當然である。彼れは云つて居る。『物に價值を作るは物の效用にして生産費にあらず。何こなれば、ストーヅは伊太利に於ては生産費を要すべきも而も何等の價值を有せざらむ。茲に必要なるは、何れの場所に於ても、效用が、人をして物の要すべき生産費を支拂はむと決心せしむるに足るほどに大ならむことなりとす。…物は、其の生産費に値せざるときは生産されざるが故に、又、消費者に於て此の費用を支拂はむことを諾する以上は生産さるべきが故に、多數の著者は生産費を以て價值の原因なりと記したるものなるも』斯くの如きは見方を誤れるものなり<sup>(10)</sup>。又曰く『消費者の物に附せむとする價格を決定するものは、之を生産せむが爲めに支出せらるる費用にあらず、そは一に物の效用なり』<sup>(11)</sup>。既に、生産費即ち生産の爲めに要する犠牲の全體

を以て價值の原因たらずとする以上は、此の生産費の一部分たる労働を以て價值の原因たらしむるの説も當然に彼れの排斥する所とならざるを得ない。即ち彼れは、Smithの『労働は一切の物に支拂はるる原始的價格なり』の語を引用し、Smithを以て此の點に於て労働を價格の源泉なりとする人々の意見に同ずるものなりと評して<sup>(12)</sup>之に反對の意見を述べて居るのである。

(10) Catechisme, ch. II (p. 10. en note.)

(11) Traité, Liv. I, ch. 1. (Ve ed. Tome I, p. 6. en note.)

(12) Traité, Liv. I, ch. 27. (Tome II, p. 91. en note.) — 此の點に於ける Say の Smith 評は當を得て居らなからうに思はれる。後述第五節參照。

#### 四

Say が價值發生の原因を效用に求めたことは右の如くであるが、然らば價值の分量は何によつて定まるとしたか。既に價值發生の原因を效用に求めたる以上は、其の分量も效用の程度によつて定まるとなすのが Say にとつては推理の當然たるが如くに見える。Ricardo は Say を以て價值を效用に比例するものとなしたりと解し、既に千八百十五年八月十八日附の書簡を以て此の點を非難して居る。

其の一節に曰く『予は、貴下が價值なる語の意義を少しく改めて、躊躇しつゝも之を效用に依屬するものとなせるを見る。されど予は敢て云ふ、貴下は未だ此の定義し惡き語の説明に附着する困難に打ち克ちたりとは思はれず。物の效用が其の價值の基礎たるとは異論の餘地なき所なり、されど、其の效用の程度は其の價值の尺度たり得るとなし。生産の困難なる一商品は生産の容易なる他の商品に比して常に高價なるべし、後者が一層有用と一般に認めらるゝ場合に於てすら然り。生産物が價值を有せむが爲めには效用を有することを必要とすることは正しく真なり。されど、其の生産の困難のみが其の價值の唯一の尺度なり』云々。 Malthus も Definitions of Political Economy. に於て『Say氏は、一人又は他人にとりて效用なきものは價值を有し得ずとの原則より出發して、奇しくも效用と價值とを同一視し、一貨物の效用をば其の價值に比例せしめたり……』とて同様の非難を試みて居る。然し Say 自身は無條件で效用の程度が價值の程度を定めると考へて居たのではない。以前の著作に於て如何なる意見を示して居たかの點は、今之を検索するの便宜を持つて居らないが、少なくとも千八百二十一年以後に於ては斯く考へて居

たのでないことだけは Say の次の書簡に照らして明かである。即ち Say は、同年七月十九日附を以て Ricardo に送つた書簡の一節で次の如く云つて居る。

『貴下は予に惠贈せられたる貴著 [Principles of Political Economy and Taxation.] の最終版に於て、人は金一封度に對して鐵一封度に對しての二千倍を支拂ふも、而も金は鐵の二千倍だけの效用を含むことなし』云々。予の説に於ては、此の現象は次の如くに説明せらる。即ち、今假りに、鐵一封度は金一封度に比して、價值は二千分の一なれども、效用は等量なりと假定せむ。然るに、鐵の中には、自然が吾人をして支拂はしめざる效用千九百九十九と吾人が勞働……によりて創造する效用一とが存して茲に鐵一封度中に存する效用二千を生ず、然るに金一封度中の效用二千は有價的にのみ獲得せらる。吾人が鐵を消費するに際して支拂はざる千九百九十九の效用は水及び空氣の如くに我が自然的の富を成し、吾人が支拂はざるを得ざる僅かに一の效用は社會的の富を成す。金一封度中に鐵一封度中よりも二千倍だけ存する所のものは此の有價的の效用なり』云々。

(1) Ricardo à J.-B. Say, 18 août, 1815. (Cours, p. 601.)

- (2) Definitions of Political Economy, 1827, ch. IV, p. 19-20.  
(3) Ricardo, Principles, Gonnor's edition, p. 267. 參照。  
(4) J.-B. Say à Ricardo, 19 Juillet, 1821.

之によつて見れば、Sayは、價值は效用の總量によつて定まらず、效用總量中の有價的な部分のみに比例すると云ふのである。此の點は、彼れの最後の著作たる Cours Complet には明瞭に記されて居る。曰く、『物の有する價值の第一の基礎たるものは效用なるも、さればとて其の價值は效用の程度まで高まるものにあらず。效用には、自然より無償にて與へられたる效用と、人間が犠牲を拂つて物に與へたる效用とあり。價值は、是等の效用の總量中、人間によつて物に與へられたる效用の程度まで高まるに過ず。此の效用の餘剰は、人をして支拂はしめざる自然的の富なり』。『世には、效用と價值との兩者を包含するも、而も其の割合を異にするものあり。鐵の價值と金の價值との比較の如きは即ち是れなり。金は、疑もなく鐵よりも效用少なし、而も遙かに大なる價值を有す。蓋し金には、社會的の富、交換の富が頗る多大の割合を以て存するに反し、鐵には……小量の社會的價值と……多

量の自然的價值とが存するを以てなり』<sup>(5)</sup>。然るに、Sayが他の個所に於て説明したる所によれば、人間によつて物に與へられたる效用とは、産業により各種の生産的勤勞によつて物に移されたる效用である、而も是等の生産的勤勞はそれごとく評價せられて時價を持つ、而して其の金額が合して茲に生産費を構成する、<sup>(6)</sup>とせられる。斯く見來れば、彼れの意見は、結局價值の分量は生産費によつて定まる、と云ふに歸着するのである。

- (5) Cours, Pt. I, ch. 2.  
(6) Cours, Pt. I, ch. 3.  
(7) Catechisme, ch. 3. (Œuvres Diverses, p. 13.)  
(8) Traité, Epitome, art. Valeur des choses.

斯く解することの不當ならざるべきことは、Say自身が、價值は生産費と一致するの傾向あるものなることを諸所に述べて居ることによつて裏書せられる。例へば、Coursに於ては、『以上吾人は、生産物の價值が生産費と等しくなる場合を假定したるも、それは、斯かる場合が最も簡單且つ頻繁なるを以てなり。何となれば、若し一企業が利潤を含めたる費用以上を與へ、同種の他の企業よりも多大の利潤を與

ふる場合には、生産者は之に蝟集し來り、其の生産物は多大の競争を蒙り、價值低落して遂に生産費以上の價值を有せざるに至るべきを以てなり<sup>(10)</sup>と云つて居る。<sup>(11)</sup> 『Traité』に於ては『生産物の時價は永く生産費以下に止まること能はず』<sup>(12)</sup>と云つて居る。更に、Coursに於ては『同價值にて供給し得る商品の分量は、同じ生産費に對して生産し得る双方の分量なり。故に、物が偶然に其の生産費より高きとき又は低きときは不自然なる價格(prix force)に在るものにして、それは絶えず平準を恢復せむとしつゝあり。……此の一事は、二生産物の交換は眞實に於て其の生産費の交換に外ならざることを示す』<sup>(13)</sup>と云つて居る。而して千八百二十八年五月二十二日附を以て Thomas Tooke から送り來つた書簡に挿入したる註に於ては『物の價值の直接原因は其の效用中に在り、されど此の價值の高きは生産費によりて制限せらる』<sup>(14)</sup>と云つて居る。然し、就中、最も注目し値するものとして、彼れが『Traité』に於て、『人の一物に附する價值が果して眞の效用に比例するや否や、物の評價が正しきを得るや否やは、之を評價する人の判斷知識、偏見等の如何に依るものにして、健全なる道德と眞の利益に關する正確なる觀念とは、人をして眞實の財を正しく評價するに至らしむ』<sup>(15)</sup>。『生産の自由と契約の自由とが完全となるに従つて物の價值は益々其の眞實の價值に接近す』<sup>(16)</sup>。『生産物の價值の眞實の變動は其の生産費の受くる變動なり』<sup>(17)</sup>等の言葉によつて、生産費こそ、又は生産費に基づいて定まる價值こそ眞實の價值であると做して居る<sup>(18)</sup>ことを擧げることが出来る。Sayが、價值の分量に關しては生産費説を採つて居つたこと、以て知るべきである。

(9) Cours, Pt. I, ch. 9.

(10) Traité, Liv. I, ch. 1. (Tome I, p. 6, en note.)

(11) Cours, Pt. III, ch. 4.

(12) Thomas Tooke à J.-B. Say, 22 Mai, 1828. (Cours, p. 653, note.)

(13) Traité, Liv. I, ch. 1. (Tome I, p. 5, en note.)

(14) Traité, do. (p. 8, en note.)

(15) Traité, Liv. II, ch. 2. (Tome II, p. 176.)

(16) 生産物が始めて世に出る時に要する費用即ち原價(prix originnaire)が即ち謂ふ所の眞實の價格であり、Smithの云ふ自然的價格であることは、Say自らが之を言明して居る所である。(Cours, Pt. III, ch. 5, p. 172-4.)

五

以上述べ來つた價值論に於て、*Smith* は彼れにとつての主要なる英佛の先學の何れに一層多く負ふ所あるや。此の點を見むが爲めに先づ彼れが自ら自己の師傅なりと告白したる *Smith* の説を窺はう。

*Smith* は『國富論』に於て、價值には、個々の物の效用を指す所の使用價值と、或る物件の所有が齎らす所の他の貨物を購買するの力を意味する交換價值との二者ありと做しつゝ、前者に就いては殆んど何等の論ずる所がない。即ち、其のグラスゴー大學に於ける『講義』に於ては之を以て貨物の市場價格決定の三原因の一たる需要を喚起するの基礎なりと簡單に説き、『國富論』に於ては分量の點で之と交換價值との間に多大の相違ある場合あることを金剛石と水との例によつて指摘したるのみにて、全然之を放棄し去り、専ら交換價值のみを取扱つて居るのであつて、其の眞の尺度、其の構成要素、其の變動の三點を研究して居る。而して其の云ふ所に依れば、第一の點即ち交換價值の眞の尺度如何に就いては、勞働に於て常に不變的なる尺度を見出すと做し、貨物を所有して而も自ら使用又は消費せむとはせずして之を他の貨物と交換せむと欲する人々にとつての此の貨物の價值は、

それが彼等をして購買又は支配するを得しむる勞働の分量に等しとする。

次に、第二の點即ち價值の構成部分を論ずる個所に於ては、價值の發生原因<sup>(9)</sup>を説明すると同時に價值の分量を説明して居るのであつて、資本の集積及び土地の私有に先だつ原始的の社會に於ては物を取得するに要する勞働量が價值の有無及び大小を定め、勞働の報酬が價格を定めるが、資本の集積を見るに及んで、賃銀の外に、原料品の代價を償ひ且つ資本の危険を償ふ報酬が價格構成の第二の部分となり、更に土地の私有を見るに及んで右の二要素の外に第三の要素として地代が價格の構成に参加するに至る、文明社會に於ては是等の三部分が大部分の貨物の價格の構成部分となる、と説明する。而して第三の點に就いては、*Smith* は、先づ價格に市場價格と自然價格との二種あることを認め、前者をば貨物が通例その値にて賣らるゝ價格と定義し、後者をば『貨物を生せしめ、加工し、市場に齎らすに用ひらるゝ土地、勞働、資本に對して地代、賃銀利潤を自然的の(即ち世間普通の)率に従つて支拂ふに過不足なき價格』とする。而して市場價格は市場に齎らさるゝ貨物の分量と有效需要の分量との割合によつて定まるのであつて、此の割合如何によつ

て自然的價格より或は高く或は低きことあるべきも、而も供給は自然的に有效需要に一致するの傾向あるが故に、總べての貨物の價格は常に自然的價格を中心として之に歸向せむとすしつゝあるものである。とするのである。<sup>(6)</sup>

(1) Wealth of Nations, Bk. I, ch. 4. Cannans Ed. p. 30. (以下、本書の引用頁数は此の版に依る。)

(2) Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, Cannan's Ed., p. 176.

(3) Wealth of Nations, p. 30.

(4) Ibid., Bk. I, ch. 5, p. 32, 38.

(5) Ibid., p. 35.

(6) Smithが價值發生の原因を何に求めたかの點に就いては、『勞働こそ一切の貨物の交換價值の眞の尺度なり』、『勞働は總べての物に支拂はれたる最初の價格、原始的の購買貨幣なり』又は其の他の語句に據つて、Smithは價值の原因を勞働に在りと做せるものなりと解釋する説は一見首肯を貰ひ得るが如くであるが、私は、前者の語句は單に勞働が價值測定の終局的の要具たることを云ひ、後者の語句は貨物獲得の費用が或る時代に於ては勞働のみであつたことを云ふに止まるものと解し、價值發生の原因は之を價格構成部分に求めたものであると解する。

(7) Wealth of Nations, Vol. I, p. 49-51.

(8) Ibid., p. 57-60.

Smithの價值學説は可なり難解のものであつて種々の異論もある所であるが、之を何等矛盾なきやうに解釋せむとせば、私は之を大要次の如くに要約し得ると思ふ。即ち、價值中の一たる交換價值の意味に於ける價值は、他の貨物を購買支配するの力である。此の力は勞働によつて眞實に測ることを得るものなるが故に、貨物の眞の價值の分量は其の貨物が購買支配する勞働の分量なりと云ふこととなる。然るに、貨物が支配する勞働分量は何によつて定まるかと云へば、それは貨物獲得の爲めに必要とせらるゝ費用によつて定まる。此の費用は原始時代に於ては勞働のみであるから其の場合には交換價值は費消勞働量によつて定まるが、文明時代に於ては勞銀・地代・利潤の和によつて定まることになる。尤も、市場價格は普通の率に従つて右の費用を支拂ふに過不足なき程度の自然價格と一致しないことがあるが、結局は常に之に歸向せむとするの傾向を有するものである。

(9) Smithが『貨物を得むと欲する人にとつての其の貨物の眞の費用は、之が獲得の勞苦なり。之を得たる人、而して之を處分又は他物と交換せむと欲する人にとつての各物の眞の價值は、それが彼をして省節せしめ他人に課することを得る勞苦なり』(p. 32)と云つたのは、此の費用の終局眞實の尺度に照らして其の分量を示したるに

過ぎずして、何れの社會でも價值が之を作る爲めに現在費消せらるゝ労働のみで定まるゝなせるものではない。之を解して、値が土地・資本と對立する労働の投下量のみに比例すると做せるものなりと做すは予の探らざる所である。

Smithの所説を右の如くなりとして扱て之を前記のSayの所説と比較して見るに、Smithは價值を交換價值のみに限つて論ずるの點、價值の分量が結局(普通平均的)生産費に歸向するの傾向ありと做した點に於てはSayに對して範を垂れたとも云ひ得られよう。然し、Smithが僅かにValue in use即ち效用をば需要喚起の基礎と認め居るの一事を除いては、價值發生の原因を價值の分量と分つて考へることなきに反し、Sayは效用を以て價值發生の原因なりと詳論して居るの點、及び、價值の分量決定の標準に關して效用と生産費との兩標準に一種の折衷融合を試み、純然たる生産費説と純然たる效用説との中間を彷徨して居るの點に於て、SayはSmithから遠ざかつて居る。云ふことが出来よう。然らばSayはSmithから遠ざかつて何人に近づいたか。私は、Sayは佛蘭西に於ける先學に近づいて居るものと見るものである。

## 六

Sayが價值論に於て接近して居ると思はれる節の頗る大なる者の一人はCondillacであつて、其のSayに與へた影響はSmithの影響よりも一層大なるものあるが如くに思はれる。CondillacはSmithの國富論と同年に、Le Commerce et le Gouvernement, etc. を公にして居るが、其の價值論は同書第一部の最初の數章及び其の他數個の章中に於て窺はれる。

Condillacは價值を主觀的なものに解し、欲望を基礎とする效用を基礎として其の發生の原因を説明して居る。即ち、先づ、人間には身體の構造の結果として生ずる自然的の欲望と、慣行の結果として生じ遂に必要となるに至れる後天的の欲望との二種あることを説明したる後、物が吾人の欲望の何れかに役立つときは之を效用あり(utile)と云ひ、何物にも役立たざるべき又は役立て得ざるべきは效用なし(inutile)と云ふ。故に、物の效用は吾人の物に對して有する欲望を基礎とす。『吾人は此の效用に従つて、即ち、物が大小種々の程度に於て或る用途に適當すと判断したる場合には、物に對して大小の尊重を拂ふ。此の尊重は、吾人之を價值と呼ぶ。』

……價值は效用を基礎とす』と述べて居る。斯く、Condillacは價值の發生原因をば效用といふ物の性質に在りとするが故に、『物は、人の想像するが如くに、費用を要するが故に價值あるにあらず、價值あるが故に費用を費やさしむるなり』と云つて生産費説を排斥し、『物に或る程度の稀少性ありとは理解し難き所なり、私見によれば、物は吾人が吾人の使用に必要なだけを所有せずと判断するとき稀少たり』豊稀如何は一に欲望と物の所有量との割合に關する吾人の判断に繫る、と云つて稀少性説をも排斥したる後、價值は吾人の判断と關係なき物に内在する絶對的の性質にあらず、『それは主として吾人が其の效用に就いて下す判断の中に在り』とて、價值をば人間の判断に依屬する主觀的のものなりと論じて居るのである。

(1) Le Commerce et le Gouvernement, etc. Pt. I, ch. 1. (Collection des Principaux Economistes, Tome XIV. Mélanges d'Economie Politique. Guillaumin. p. 249-50.)

(2) Ibid., (p. 250-51.)

(3) Ibid., (p. 253.)

(4) Ibid., (p. 254-5.)

(5) Ibid., (p. 255.)

次に、Condillacは價值の分量の決定標準を何に求めたか。此の點に就いては、價值の大小は時と人にとつて相對的なる欲望即ち效用の大小に依ると做して、『渴したる旅行者は一杯の水に百ルイを支拂はむ、而して此の水は百ルイの價值を有せむ。何となれば、價值は物の中に在るよりも、一層多く、吾人の之に對して拂ふ尊重の中にあり、而して此の尊重は吾人の欲望と相對的にして、吾人の欲望の増減するとき即ち増減を來すを以てなり』と云つて居るが、同時に物の分量の大小も價值に影響するに做するのであつて、『物が豊富に存在するときは效用減じ、従つて價值も減じ、過剰にして何等の用にも供し能はざるときは效用を失つて ( inutile ) 無價值となる。』の效用同一なる場合には、稀少又は豊富の程度を正確に知り得る限り、價值の大小は此の豊稀の程度に依るも、……此の程度は決して知ること能はざるものなるが故に、價值の大小は主として此の程度に關する吾人の意見に依る、と云つて居る。畢竟、價值の分量は欲望と物の存在量との大小によつて、否、此の點に關する判断によつて定まるとするのであつて、主觀的價值論に徹底して居るのである。

(6) Ibid. (p. 253.)

(7)(8) Ibid. (p. 252.)

以上の如く主観的なる價值を論じ來れる *Conditio* は、此の價值を基礎として價格を論ずる。其の云ふ所によれば、物は吾人が之に對して欲望を有することのみによつて價值を有することになるが、此の價值ある物を他物と交換せむとする場合に至つて始めて價格を有することになる。交換を行ふ場合に於て双方が自己の與へる物に對しての受ける物の分量、否、之に對して拂ふ尊重が價格である。之を一般的に云へば、或る物に就いて交換を行ふ總べての人々によつて一般的に尊重せらるゝ一物の價值に比較しての、同様なる他物の價值に外ならない。然るに、斯かる交換は、交換者全般によつて交換物の双方に對して價值が認められた場合でなければ行はれない。故に、價值が價格の基礎である。斯くて、物は交換を行ふ瞬間に於て吾人の拂ふ尊重に相關的なる價格を有するに過ぎざるが故に、價格は交換の瞬間に於て一定の大きさを有するに過ぎない。それは何等絶對的の分量を有しないのであつて、其の基礎たる價值の變動につれて變動を來す。即ち、第一には物の豊稀の程度によつて變動を來し、第二には交換希望者數の多少、即ち競争の程度によつて變動を來す、と云ふのである。(9)

(9) *op. cit., Le Partie, ch. II.*

然しながら *Conditio* は、斯くの如く常に不定であり且つ變動を來す所の價格も、永久的の眼から見れば結局或る水準を守らなければならぬと做して居るが如くである。思ふに彼れば、物の價格に眞實の價格 (*veri prix*) と虚偽の價格 (*faux prix*) との二者あることを認める。而して、眞實の價格とは、物に之を與へることを必要とする價格、攪亂を生せしめざる調和的の價格、狭き範圍内に於ける價格變動の兩端内に踐み止まれる價格、總べての者にとつて等しく有利なる價格、永久的なる價格であり、虚偽の價格とは、必然的に攪亂を生せしめる價格、狭き範圍内に於ける變動の兩端外に逸出せる價格、生産者か消費者か何れかの一方を傷ける價格であるとする。(10) 然らば、如何なる場合に價格が眞實のものであり得るか。商人が其の再販賣せむと欲する物に對して與へたる價格、其の運送の費用、倉庫の費用、保存の爲めの日常費用等の如き一切の立替の償還を受けたる上に、更に自己の産業の賃銀をも收め得るが如き程度の價格で賣ることを得る場合(11) には、攪亂は生ぜず、商人

も傷けられることなくして済む所の眞實價格を生じ得る譯であるが、斯かる眞實價格は、生産者と消費者との間に於て契約が自由意思によつて行はれ最大多數の賣手と買手との間に競争の行はれる場合に於て始めて之を見ることが出来るとする。<sup>(10)</sup> 然るに彼れは、必需品の商業に於ては價格は、それが眞實のものたるときは永久的であること云つて居る。<sup>(11)</sup> 即ち吾人は、彼れが費用を償ひ得るが如き、従つて攪亂を生せしめざる眞實の價格は、完全なる自由競争の行はるゝ場合に實現される所の永久的の價格であると做し、價格の結局生産費に制約せられることを認めたるものなることを知るのである

(10) op. cit., ch. xx. (p. 325.)

(11) op. cit., ch. VIII. (p. 271.)

(12) op. cit., ch. XXI. (p. 326, 328.)

(13) Ibid. (p. 327.)

今、以上述べ來れる Condillac の所説を Say の所説と比較して見るに、Say が價值を交換價值のみに限つて論じて居るに反し、Condillac は價值の名の下に主觀的な使用價值を論じ價格の名の下に交換價值を論じて双方偏頗なく取扱つて居るの

點並びに、Say が效用を基礎として交換價值發生を説くに反し、Condillac は效用を基礎として價值の發生を論じ此の價值を基礎として價格即ち交換價值を説くの點に於て、兩者の間に多大の徑庭あるを見る。然しながら、兩者共に自ら價值と呼ぶ所のもの、基礎として效用を採るの點、及び、價值(Condillac)の價格は結局生産費に合致するものとなせるの點に於て、兩者の間に一致する所あることが發見される。然るに是等二個の一致點の中の第一のものは、之を Smith に見出さむとしても殆んど見出すと能はざる所であつて、當に經濟學上に心理的色彩を帶ばしめる佛蘭西的特質とも云ふべきものである。而も Say が此の點に於て Condillac と一致せる一事を以て單に國民性の發露のみ見るべからざること、前者の論著中に屢、後者の所論が引用せられて之に精通せるの痕を示して居ること、前者の著作中の章節の所題が後者の著書の諸章の所題と酷似せる所少なからざること等によつても推察せられるのであつて、價值論に於ては Say は Smith に負ふよりも Condillac に負ふ所一層大なるものがあること云ふことが出來よう。<sup>(14)</sup> 若しそれ、價值の分量をば廣義又は狹義の費用に一致するものとなすの點に至つては、それは Smith

その他の英國學者に特有なものではなく、Smithを同時又はそれ以前の佛蘭西人の著書中にも、效用による價值の説明と相並んで、等しく之を見出し得るのである。斯かる適例として次に Turgot の所説を窺はう。

(5) Davenport の言 “The first systematic exponent of the utility school of value was J. B. Say.” (Value and Distribution, p. 108.) に對しては警戒を要する。

七

價值に關する Turgot の意見は、Smith の『國富論』の公刊に十年を先だつて執筆された *Réflexions sur la formation et la distribution des richesses.* 及び *l'abbé Morellet* の企てた *Dictionnaire du Commerce.* に寄稿の目的を以て略同じ頃に執筆された論稿の *Valeur et Monnaies.* 及び其の他數篇の短文及び書簡等々に於て之を窺ふことが出来るが、其中で最も詳細な所論は *Valeur et Monnaies.* 中に展開されて居る。

(1) *Œuvres de Turgot et documents le concernant, avec biographie et notes, par Gustave Schelle, 1919. Tome II, p. 534. en note. 參照。*

(2) *Œuvres, Tome III, p. 79. en note. 參照。*

Turgot は價值に尊重價值 (*Valeur estimative*) と評定價值 (*Valeur appréciative*) との二種

あることを認めるが、共に之を主觀的なものと見て居る。其の云ふ所によれば、尊重價值とは、物が吾人の享樂に對し欲望満足に對して適當であること見做さるゝ其の欲望適合性を表はし、人間の欲求の目的物に拂はるゝ大小の尊重であつて、全く主觀的な使用價值に外ならざるものである。<sup>(1)</sup> 又、謂ふ所の評定價值とは、物の交換價值の義であるが、それは、交換の兩當事者が各、一物を保有せむとするの欲望と他物を得むとするの欲望とを比較し其の結果が兩者の間に比較又は討議された結果として定まるものであり、而して交換條件即ち價格を決定するものなるが故に斯く呼ばれる。而もそれは、前者に比較すれば、交換に際して兩當事者に認めらるゝ二個の尊重價值の中間的平均的のものたるの點、並びに、交換の兩目的物に就いて完全に同量<sup>(2)</sup>なるの點に於て相違する所あるも、素より前者の一場合に外ならないから、本質的に性質を同じうするものとされて居つて、<sup>(3)</sup> 是れ亦主觀的なものと觀られて居るのである。故に、Turgot に於ては、價值は全く主觀的なものであり、それは物の欲望適合性を基礎として發生するものであるとされて居るのである。

(1) *Œuvres, Tome III, p. 84.*

第十九卷 (一六二一) 價值論より見たるセイの地位

(4) Turgotは、交換は等量の價值と價值との間に行はれるものであるとすが故に此の言あり。(Œuvres, Tome III, p. 91.)

(5) Œuvres, Tome III, p. 92.

主觀的なる此の價值は如何にして之を測り得べきか。Turgotは、價值は比較によつてのみ測り得られるものとす。『孤立人が唯一の物に對して認める價值は、他の何物とも比較されざるが故に之を測示することを得ない。唯、多數の物品の間に撰擇を行ふに至るとき始めて兩者の價值が心中で比較されて其の分量が表はされ得るのみ。』<sup>(5)</sup> 價值を表明する唯一の方法は、一物の價值を或る他物の價值と相等しと云ふことである。價值と價值とを比較し、基準とせらるゝ價值の分數又は倍數を以て表はすのみである、とす。然るに彼れは、『價值の比較は交換の際に於て最も能く之を表はすことを得るものであり、又、『交換に於て他物と引換に與へる一物は價格と呼ぶ』<sup>(6)</sup> 即ち Turgotは、價格によつて價值を測らうとするのである。蓋し、價值と價格とは區別を要するものであるが、後者は前者の表明に外ならざるが故に、嚴密なる正確を必要とせざる場合には兩者は互に代用せられ得る<sup>(7)</sup>と考へて居るからである。

然し此の價格は何を尺度として測るべきか。Turgotは云ふ。孤立人は自然を相手として最初の商業を行ふものである。『彼れの享樂の目的物件は彼れにとつて配慮・疲勞・勞働を要し、少なくとも時間を費やさしめる。各物件の探求に用ひらるゝ彼れの能力を使用する<sup>(8)</sup>が、彼れの享樂の對償であり、云はゞ其價格である』<sup>(9)</sup> 即ち、Turgotは人間の能力・勞働を採つて價格測定の尺度とせむとするのであつて、『一物の尊重價值は孤立人が此の物の探求に捧げ得る能力部分と彼れの有する能力全體との割合に外ならぬ』。『二人間の交換に於ける評定價值は、二人それらの能力中、彼等が交換される物件の各の探求の爲めに捧げむとする部分の和と、是等二人の能力全體の和との割合に外ならぬ』<sup>(10)</sup>と云つて居るのである。

(6) Œuvres, Tome III, p. 85.

(7) Ibid., p. 95.

(8) Ibid., p. 95-6.

(9) Ibid., p. 95.

(10) Ibid., p. 87.

(II) Ibid., p. 92.

斯く勞働の尺度を以て價格を測り、此の價格によつて價值を知り得るとして、扱て此の價值の分量は如何にして定まるとするか。Turgot の説く所によれば、尊重價值の大小は、第一には人の判斷に依屬するものであつて、欲望の變化につれて時々變動する。第二には將來の欲望の豫見の有無程度に依屬する。豫見の行はるゝ場合には價值増加し、それが永久的に行はるゝこととなれば、物の探求の順序は物の「優良性」によつて修正を受けることを外にしては、種々の欲望の必用と效用との順序に比例せしめられることになる。第三には自己の探求の目的物の獲得の困難に依屬する。效用も品質も同等なる二物の間に於ても、之を再び發見するに多大の勞働を要するが如き物を取得せむが爲めには頗る多大の配慮と努力とが費やされる<sup>(12)</sup>と云ふのである。

然らば評定價值に就いては如何。此の點に就いての意見は、上來所述の意見の披瀝せられある論稿 *Valeur et Monnaies*. 中には見出されないが、*Réflexions, etc.* の他に於ては之を窺ふことが出来る。即ち、彼れは *Réflexions*. に於て、『個々の交換をば孤立のものとして單にそれのみを考察する限りは、交換さるゝ物件各自の價值の尺度としては、獨り、双方ともに均衡を保てる、契約者の欲望又は欲求あるのみにして、彼等の自由意思の合致によりてのみ決定せらる。然し需要者側にも供給者側にも多數の人ある場合には、『種々の供給と種々の需要との間に於ける中間的平均的價格が時價となる……』と云つて居る。勿論、此の時價は頗る變動し易いものである。彼れは、*Sur le Mémoire de Saint-Péray*. に於て、右の時價 (*prix courant*) を賣價 (*valeur vénale*) と呼んで、『賣價は需要と供給との關係のみによりて制規せらる、それは欲望によりて變動し、屢意見のみによりても之に頗る顯著且つ急激なる變動又は不同を來し得べし……』と云つて居る。然しながら、此の變動常なき時價も永久的には結局或る標準に歸向するの傾向ありと考へ居たるものなることは、彼れの屢次の表明によつて明白である。即ち千六百七十七年三月二十五日附を以て David Hume に送つた書簡中に於て、時價と基本價格 (*prix fondamental*) とを區別し對立せしめ、『時價は需要と供給との割合によつて定まるも、基本價格は、勞働者の賃銀に就いては彼れの生活維持に要する費用なり。後者は前者の直接原因にはあ

らざるも、而も前者の下り得る最低限度を成す……<sup>(16)</sup> 旨を述べて居り、又前記の Sur le mémoire de Saint-Pérvay. に於ては、賣買價值(valeur vénale)と基本價值(valeur fondamentale)との二者を區別し對立せしめ、『基本價值とは物が之を賣る人に掛る費用にして原料品の費用と投資の利子と勞働及び産業の賃銀とより成る、そは頗る確定的にして、賣手と買手との間に成立する價值即ち賣買價值よりも變動遙かに少なし。……兩者は直接には全然異なる原則に依據するを以て其の間に必然的關係は存せざるも、而も賣買價值は絶えず基本價值に接近せむとする傾向を有するものにして、永久的に之より遠ざかること能はず。前者の永く後者以下に止まり得ざることは明白なり……又、永くそれ以上に止まることも不可能なり……<sup>(17)</sup>と云つて居るのである。

(16) Œuvres, Tome III, p. 85-7.

(17) Reflexions, § XXXI.

(18) Ibid., § XXXII.

(19) Œuvres, Tome II, p. 655. en note. — Turgot が價值と價格とを相互代用し得べしとなして居ることを前陳の如し。

(20) Ibid., Tome II, p. 663-4.

(21) Ibid., Tome II, p. 655. en note.

今、右の如き Turgot の價值論を Say の價值論と比較して見るに、Turgot が價值と使用價值と交換價值との二者あることを認めて等しく之を論じつゝも、兩者を本質上同一のものとして見て飽くまで主觀的に扱つて居り、僅かに價值の表明たる價格によつてのみ其の分量を測示するを得るに過ぎざるものとなせるに反して、Say は兩種の價值の區別を認めつゝも、使用價值は專斷不確定にして斯學の研究の範圍に入り難しとなして獨り交換價值のみを取扱つて居り、從つて始めから價值を客觀的のものとして取扱つて居るの一點に於て著しき相違あるを見る。然しなから、Turgot が欲望適合性(即ち Say 及び Condillac の所謂效用に當るもの)を基礎として使用價值の發生を説き、又此の使用價值を基礎として交換價值を説けると同様に、Say が自ら使用價值に外ならずとする效用を基礎として(交換價值の發生を説けるの點並びに、双方ともに其の時々の價值は變動するも結局費用に歸着せむとするの傾向あることを認めたるの點に於ては類似又は一致して居るのである。・

而も此の類似又は一致は必ずしも偶然の一致たらずして、Say が Turgot の影響を受けたるに基づくこと少なからざるべきことは、單に Say の *Traité* の書名の副題又は内容篇別が Turgot の *Réflexions* の書名と相通ずる所ある一事<sup>(81)</sup>によつて推定せられ得るのみならず、更に Say が Turgot の人物及び業績を賞揚して居ること<sup>(82)</sup>、其の著作集の公刊せられ居る旨を指摘して居ること<sup>(83)</sup>、其の貨幣論及び金利論の如く *Réflexions* 以外の作物に一層多く現はれ居れる學說を賞讃して居ること<sup>(84)</sup>等によつても之を推察することが出来るのである。

(81) Cannan, *Theories of Production and Distribution*, p. 35.

(82) Say & *Traité d'Économie Politique*, 1<sup>re</sup> simple exposition de la manière dont se forment, se distribuent et se consomment les richesses. なる副題を與へられて居り、内容は *Production des richesses, Distribution des richesses, Consommation des richesses* の三篇に分たれて居る。

(83) Say, *Traité*, Ve éd., Tome I, p. IV, 319.

(84) Say, *Cours*, Pt. II, ch. 2. (p. 100) en note.

(85) *Ibid.*, Pt. XI, 3<sup>e</sup> époque. (p. 568.)

## 八

以上の如く、Say の價值論を一方では Smith, 他方では Turgot 及び Condillac の價值論と比較し來れば、價值の發生を説明するに效用を以てし其の分量を説明するに有價的效用即ち生産費を以てして居る所の Say は、後者の點に於ては Smith と合するも前者の點に於ては之と離れ居るに反し、Turgot 及び Condillac とは双方の點に於て相通ずる所あることが知られる。而も Condillac と云ひ Turgot と云ひ共に其の所說に於て先驅者を有するのであつて、Turgot に數年を先だつて Quesnay が既に使用價值 (*valeur usuelle*) と賣買價值 (*valeur vénale*) とを對比して論じて居り、又、競争の完全に行はるゝ場合には價格が費用を償ふ程度に定まる所の眞實價格(一名基本價格)に一致することを説明して居る。の果して然らば、價值に關する Quesnay の思想は Turgot に影響を與へ、Turgot の思想は Condillac に傳はり、而して Condillac の思想は Say の承繼する所となつたのであつて、所詮 Say は價值論に於ては英國最負たらずして寧ろ祖國の傳統を繼いだものであると見るを至當とするであらう。フイジオクラート同人中の最後の一人たる Du Pont de Nemours は、千八百十四年六月二十日附を以て Say に與へたる書信の中に於て、貴下が、貴下の乳母の一人、而も

貴下に最も多くの乳と最も良き乳とを與へたる乳母を打たむと努むる理由如何。Smithは決して斯くの如き事を爲さざりき。彼れは其の乳母を語るに感謝と尊敬とを以てせり。彼れは「母様有難う」と云へり。然るに、貴下は何故にQuesnay氏を指稱するに單に醫師 Quesnay の名のみを以てせらるゝや。貴下の吾人その知識を彼れに負ひつゝある重要な諸真理の一に就いてだに語らむとせられざる理由如何……』と云ひ、更に翌年、その佛蘭西を去つて米國に息子と會せむが爲めに太平洋を横ぎるに當つて船上に四月二十二日附を以て認めたる書簡中に於ては、「貴下は吾人の原則の殆んど總べてを採用せり、而して、若し公收入に關する原則を除くとせば、貴下は之より全く同一の實際的結論を導き出しつゝあるなり。親愛なるSayよ、貴下は公然と吾人を否認せむとするの幻想を懐きつゝあるも、そは貴下がSmithの系統を引けることによりてQuesnayの孫たりTurgotの甥たることを妨ぐることなし」と云つて居る。此の評言は、Sayの學說體系の全體に就いては必ずしも肯綮に當れるものとは云ひ難きも、而も、少なくとも其の一部の所説に就いて、就中價值論に就いては正鵠を得たものであると考へる。若しそれ Du Pont の言

を以て、單に、Sayが佛蘭西の先學に負ふ所あることを忘れたるを難するに過ぎざるものと解するとせば、吾人は其の言の洵に然るを覺えるものである。蓋し、思想は前時代からの遺産である、而してSayの時代に遺されたる經濟思想はフィジオクラートの寄與に係る所尠少なからざるが故である。

(1) Questions intéressantes sur la population, l'agriculture et le commerce. Richesse. (Œuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay, par Oncken, p. 299 et suiv.)

(2) L'art. Homme, d'après G. Schelle, L'Économie Politique et les Économistes, p. 123. ; Le Docteur Quesnay, p. 214-5. — 此の論文はEncyclopédieに寄稿の目的を以て執筆されたが、遂に公表されずして永く埋もれて居たものである。然るに近年に至つて他の論文Impôtと共に発見され Revue de l'Histoire des Doctrines Économiques. 誌上に掲載された。(Schelle, op. cit., p. 116-7.)

(3) Œuvres Diverses de J.-B. p. 362.

(4) Ibid., p. 366-7.

附言。本篇に現はれ來る諸學者の所説に關しては參考とすべき幾多の作物が本誌上に掲載されたが、最近のものだけを採つて云へば、Smithに關しては『アダム・スミス生誕二百年紀念號』(第十七卷七號)上の諸論文佛

蘭西の諸學者に關しては津田誠一氏『佛蘭西經濟學に於ける價值論の發達』第十八卷七八九、十、十一號を併讀されたい。

## 消費組合運動と組合使用人

町田義一郎

ウエップ夫妻がその著 *A Constitution for the Socialist Commonwealth of Great Britain*. 1920 中に論じたるが如く、社會主義的國家組織に於ける消費者の任意的團體たる協同組合はその社會的並に經濟的職分極めて重大にして興味深き問題なるが、現時の資本主義的經濟組織の社會にありても亦等しく興味ある問題たるを失はざる可し。消費組合運動は彼の「ロッチデール開拓者」の成功以來未だ一世紀を出でざる今日、既に歐洲諸國に於ては全家族の三分の一を包括するに至り、その母國たる英國の状態を見るに一千萬の家族中組合員として三百萬乃至四百萬の家族を有し、年々二億磅を超過する家事必需品を供給し、之等巨額の商品の生産輸入を自ら行ふのみならず、組合自ら工場農場船舶保險或は銀行業すら資本家の利潤若しくは私人企業に依らずして經營しつゝあり。(S. & B. Webb. *A Constitution* . . . . p. 248 參照)

然らば今日斯かる成功を納めつゝある此組合運動は、現存の生産分配の組織に將來何等急激なる變革なきものと假定して、今後如何程發展し得可きか、その活動可能の範圍如何。論者或は此發達